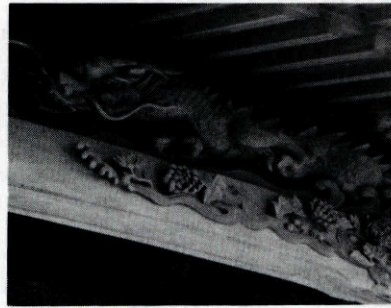


わがむらの

昔ばなし

極楽寺の本堂と竜



野波瀬の極楽寺さまの本堂の向拝には、大きな竜の彫物がある。長さはほぼ三間（約六m）。一本の木から彫りだした見事なものじゃ。お堂は天保元年（一八三〇年）の建物で、よほどの名人がつくったらしい。

昭和五十五年にお屋根のふきかえがあった。その時、向拝の飾り斗組の裏にかきつけた歌などが、ちょうど百五十年ぶりに見つかった。そこで本堂と竜の話をしよう。

今からざっと百六十年むか

し。極楽寺さまの門徒総代や世話役が集まってご相談。お堂は百二十年あまり経って、いたみもひどうなった。世の中が落ちついていない間に建てかえようではないか。裏の山を掘って、境内地を埋め

だそう。石垣は野波瀬の石屋新三郎が中々の名人じゃ。あれにたのもう。幸島のたぶの大木も松下げをお願いしようではないか。

豊原の庄屋、勝屋治郎左エ門さんが殊のほか熱心じゃったそう。話がまとまり、お上の御許しがあると、野波瀬の門徒衆は、幸島付近の海中から大きな石をひろいあげ、舟で運んだ。農家の門徒衆は鉄をふるい土を運んだ。石垣はいまだに崩れない。

さて、阿川（豊北町）の殿さまの家に、武士で宮寺の太左衛門が多かった。なかでも野村和太左衛門重信という人は彫刻が得意な大工の評判。和風という雅名で歌もよむ。だが十里も離れた野波瀬へ来てもらえようか。とにかくお願いにゆこう。

門徒衆の熱意に動かされ、老大工が弟子をつれてやって来た。大きな材が運ばれる。板もたる木も鋸でひく。手間と根気と人数の大仕事。門徒衆の労力奉仕の音がにぎわう。

仕事衆の寝泊りと炊きだしのため、庫裡の台所が新しくなった。晩には生きのよい魚と地酒がふるまわれる。

新かまの庵にまるねや
ひじまくら 和風

阿川の太左衛門、野村和太左衛門重信 七十三歳。多年みがいた技量をかたむけ、今生最後の仕事じゃ。わしは竜を彫る。石段をあがれば先ず向拝が見えるはず。そこへ仏法を護る竜を彫る。

花にきて姿はうつくし

秋の蝶 七十三翁

明日をも知れぬ老いの身。旅のわびしさ。なれど門徒衆は賞めはげましてくれる。やはりお寺は花じゃ。

鶯の経よみそうな小春
かな 和風

のどかな小春日和。「法を聞けよ」と鳴くという。鶯よ。ここは安住の地じゃ。

文政十二年 丑の菊月。竜も彫り上った。棟上げの日も近い。よい仕事をさせてもらった。仏さまのおかげじゃ。

この水の流れに浮かぶ
末の世に告げばやおかん

町民文芸

俳句

清風句会

(十一月)

生甲斐の話などして文化の日
沖村美智子

山崎 菊女

皇居にかがやく授賞文化の日
仁保 民子

明けやらぬ庭の石影虫の声
山野たけ子

暖めて帰り待つ子の母なれば
高崎はま子

野仏のおわす当りにちちろ鳴く
藤木 常

文化の日孤独の壁は厚すぎる
池田 久子

一筋の芸に老なし文化祭
田村 九重

田ばる坂忍ぶすがも無き秋暑
藤沢 忘帰

名月の光を跳ねて城うかぶ
選者 追吟

潮の香に岩千畳の秋惜む
永田 石山

野波瀬なる
堂古山に残す言の葉

その翌年、天保元年、本堂は落成した。だがその夏以来数年間、風水害が続き村中が難儀した。つかの間のよい時期じゃった。ご縁が熟してお堂ができたのじゃろう。

野波瀬 池信宏証

短歌

三隅短歌会

(十一月)

秋の陽の光さだまる塀の上置物
岡 松子
のごと白き猫おり

枯れはてし松山見巡り父徳ぶ植
堀 光太郎
林なさんと心にちかいて

早立ちの吾を送らむと朝寒むに
山中 敬子
自転車漕ぐ嫁の広きその背

ぬぐえども汗したたるに目を病
久行 コト
みてさす点滴はいたくすみたり

天領の銀山掘りゆくさまを聞き
臼井 麻子
のみのあとこき坑道に立つ

裏庭に葱つみおれば秋風に下校
立間 雅子
の子らの声聞こえくる

吹く風に波うつ尾花しろがねの
吉村 恵子
うねりとなりて秋陽に光る

たわなる秋の穂りを見とどけ
平川 喜敬
て山越えゆきぬ群れ渡る鳥

今月の納税

固定資産税

第3期分

(納期限)

十二月二十五日(金)です